

伊達羽子板

泉鏡花作

一

雪の越路は、村里も、町も、峰の如き雪に降埋め
らるゝ時は、屋根に積つた雪を降す。大空が雲に閉
ぢられて、其の白いものが、毎日々々、日とも言は
ず、夜とも言はず、ひた降に降りしきる間は、たゞ
積るばかりであるから、豫て、此あるがための冬構
へとて、野末、山家の埴生の小屋とても、柱、礎を
堅く巖乘に組むのであるから、上から押潰すほどの
雪の重量が掛からうとも、敢て地の底へもめり込ま
ず、不思議に、ゆさりとせぬ。

が、天に累々として白壁の戸前を並べた、其の一
藏の雪を、一棟此の越の一國に傾けて、降るだけ降
ると、颯と晴れて、太陽が輝く、すぐに曇つて寒く
成るまでも、一時は必ず日光の温き恵を、屋根に、
軒に漲らす。其の日當りに、積り重つたのが解けは
じめる時が物凄い。

東なり、南なり、少しでも融けて、屋根の一方が
僅ばかりも軽く成ると、藁屋、板屋、瓦葺、立處に
釣合を失ふや、白日、忽ち百雷を轟かして、偉なる
熊に唯々咬碎かれたやうに潰れるのである。

年々人死も少くない。

故に、降りに降り、積りに積つて、ふと縁が切れ
たやうに留むと見ると、翌朝を憂慮つて、夜の中に
も屋根の雪を落すのが、殆ど年中行事である。

家々から、男が、暗い、アマと言ふ出入口から雪
を這つて屋根に上る。同じ雪の、遠近の白い山々、
峰々よりも高く立つて、一人、二人、三人、五人、
コスキダと稱する、あの巖島の柱に掛つた第一番の
大きさと云ふしやもじの形した雪搔を勝手に取つ
て、障子一枚六ツに切つたほどの立體に、
筋を刻んで平で一挺、堆く引掬つて、腰を据ゑて、
呼吸ですくひ投げにドンドシンと雪の道へ投落し投
落す。長方形の雪の塊は蒼く、白く、陽
に光り、陰に輝いて、ストーン／＼と棟を飛んで、落

ちると浪の如く散つて敷く、渚を倒にした風情とも
見えよう。

此の时分には、蓑に笠、或は莫座着て頬被りした
日傭取の、右のコスキダを擔いだ處は、ちやうど五
位鷲が案山子に化けた形で、

「雪かきしよう ー 雪かきしよう」
と白い町を觸れて通る。

町に五尺の雪があれば、屋根を下して一丈に近く
成る、と云ふ寸法なれば、往來の人は塀の上を歩行
いて、家々からは、其の路へ、門格子から、雪を叩
いて、段々を設けて、出入りに上下りをするのであ
る。

屋根で雪を掻く家の前を過ぎるには、男が、
「ー 通る ー」
と呼ぶ。

「ー 頼みます ー」

と、女は言ふ習である。

一々下を覗かない、屋根の足順に勝手に投出す雪であるから、うつかり通掛ると、あたまから、大きな鼓草花の破裂弾。命にも、衣服にも別條はない、けれども、これを啖つては堪らないのに

近頃東京から来て、新地の藝子の髪ばかり結ふ、お吉と云ふ上手なのが、おなじ江戸うまれの可懐さに、こゝだけには自分から出向いて髪を上げに来る、所の蒔繪師時治の、年若な御新姐が、秋からの大病を、今日も見舞ひに来て、丁ど其の鄰家の前を通る時、南無三寶見事に一掬ひ、屋根からドンと浴せられた。

然も雪の上へニと轉んだ。

土地馴れないから、――頼みます――
「おう。」と屋根でこたへるのを待たなかつた
爲である。

豫て地方を不平なお吉が、口惜がるまい事か、癩

に障^{さは}らせまいか。

「冷いのぐらゐ我慢します
雪は綺麗で、
美しくつて、私は東京に居たつて大好でござんした
し、これが山のやうに積つたつて、そんなに憎くも
ありませんけれども、地方の野郎に頭から浴びせら
れた。と思ふと、私 惜くつて堪りませんわ ー
御新姐さん。」

雨だ、霰だ、霰だツて、もう秋のはじめ頃から、
ろくに日の目も拜めない土地でございますもの。

御馳走だ、御馳走だなんて、蕈と麩ばかり
食べさせるし、魚はあつても荒海でかち／＼だし、
みがしまつてゐるも、よく出来た。
小鳥

が名物だと言ふけれど、骨ツぼくて、おいしくも何
ともない。醤油は悪し、砂糖は高價。
秋

刀魚が嚙ぞ、と思ふ時分に、脂肪のぬけた鰯ばかり、
鮪を百刃三十刃と切身を鍵で引掛けて秤に掛けるの
を見た時は、眞個に涙が出ました。

林檎をひよろ／＼と鉋屑のやうにおろしたり、蜜

柑と言へば煎餅見たいに薄ッぺらな輪切にして、さあ、めしあがれが小笠原で、箸ではさんで出されますとね、そんな奴は死んで了へ、と思ふかはりに、此方も人間を止めたく成ります。

誰も、彼もしんねり、むツつり。上にはひよこノ、して、下には傲慢で、外が柔くつて底が硬くつて、ねばり粘り、口の前ばかり、御上使のお入も無いのに、我兒をお身代りのやうな事を言つて、其の癖頼まれたり頼んだり約束の出来た驗はない。男がね、また變に、しなり、しなりと女のやうな聲を出す、日本の中ぢやありませんか、氣障つたらありやしない。

自分の大事な新地の連中、悪く言ふではありませんけれど、色が白ければツて、皮の下は、ぶく／＼と水ぶくれ、何うしてゞございませう。洗ふと言つても髪は臭し、褌を取ると言ふのが、裾をまくるんでさ、蹴出しと褌の見境のない人だちだから、無理もありませんが、第一、御新姐さんのお世話に成つて、踊を教はつた藝子たちが、此の御病氣だ、と言

ふのにまあ、ろくにお見舞にも出て来ないで、私が
今日も、間を見てお伺ひに上る、と言へば、いや、
蔭ぢや思つてるの、心で忘れる隙はないの、お百度
を蹈んでることの、嘘ばツかり。酷いのは、貴女、
家傳の秘法で、一子相傳、うつかり人に教へると、
自分の生命にもかゝるほどの事だけれど、御新姐
さんの為だ、厭はないツて、何でござんすかね、病
氣の治るお禁厭の、もんくを教へて寄越した藝妓屋
の宿六がございますのさ。そんな事を聞かされちゃ、
此方の生命にもかゝりますから、耳に蓋をして來
ましたつけ。

彼方からもお言づけ、此方からもお取次、お見舞
の口上ばかり、三千三百三十三
と、一息にこそ饒舌りける。

此の髪結の、春頃から出入るのも、新地の廓の其
の四五人、教兒の口添へだつた。

まだ、うら若い女房は、東都で水木の名取であつ
た。――

お千は長い煩ひの、漸と炬燵に起直つた、それも
僅かに、恚う出来るのは今朝珍しく東の窓に旭がさ
した時からである。晝に重湯を少しばかり、其のは
げみで、雑と半月ぶりに枕が上つた。が、東二階の
窓を横に、床の柱に夜具を積んで、嚴寒に膚は潔け
れど、萎れ惱める水仙の葉よりも薄き脊を凭たす。
其の花の根よりも白き、細りした寝衣の手を、視め
て伏せた錦繪表紙の草雙紙の表に任して、薬の香に
染む清らかな友染の掛蒲團に、透通るやうな幽な胸
を、たよたよとして凭掛つた。
窓の障子
の薄い陽が、衣紋に、肩に、頸に、襟に、玉なす胸
の氣勢するまで緩き柳の伊達巻にも、雪を誘つて、
白く妙に、清らかに映りながら、あはれ其の影も衣
も消えむとす。

お千は唇の花の散りさうな、あはれにもの寂しく
微笑みながら、髪結の話聞いた。

三千三百三十三で、聲を出さうとした咽喉が塞が
つて、絲の亂の咳が纏るゝ。

「緊乎なさいまし御新姐さん。」

髪結は、密と背中をさすりつゝ、片手で病む人の支へ餘る黒髪の鬢の亂れ、肩よりも長く艶かなのを、軽く上に搔上げつゝ、

「落ちたの抜けたのとおつしやるけれど、貴女の此のお髪が三筋さへあれば、唯た今にも文金の高髻に結つて御覽に入れます。まだ貴女がお

二十四そこいらで、病にお負けなざるなんのツて事がありますものか、否、肺病だつて、勞咳だつて、

第一、病氣を治さうなんのと思召さないで、一日、半時もはやく、こんな可厭な地方を脱出さうと、一生懸命におんななさいまし。お床上げと聞くのを合圖に、私かね、草鞋脚絆で、ひしやくを振つて駈つけますから、順禮しても、早く東京へ参りませうね。」

「お吉さん。」

と思ひのほか、はつきりしたものの言ひで、

「貴女には濟まないけれど、此家の内へ來てからは、もう都の事は忘れて居ますよ。今頃

は不忍の池の雪、辨天様の御堂が嘸ぞ、

と半ば。口籠つて、ほろりとして、

「上野の山も霞む頃　　でも目も霞んで、

忘れました。」

「あゝ、池の端でお生れだと聞きましたね。貴女、親子だの、兄弟だのと、お氣になさるから遠慮があります。御新姐さんが、東京へお歸んなさるのに、御一所においで下さらないやうな方なら、旦那様でも、お姑御でも、皆他人だと思ひなさいまし、眞個に、こんな國は仇でございますわ。」

「お吉さん、」

と目を遣つた、蓋ものゝ小風呂敷、晝にはじめて重湯の通つた病人に、かくやお香かうを大威張で持つて來た、其の意氣なれば、言ふ事も、と俯向いて打微笑み、

「そんなに言はないでおくんなさい。おなじ此の二階で、去年、一昨年、續いて二人なくなりました。私の親たち老人二人が、お國の土に成つて居ます。」

「土にしたんでございますわね。人間の、雨、霽、霜、水で、苛め殺して。」

「否、他の人は知りません、良人の事は言ひはし

ない。世に零落れた嫁の両親を、一つ家に引取つて、
長い間、つひに一度も面を背合つた事のないやうな
お姑さんは澤山あらうとは思ひません。お吉さん、
これ、御覽なさいよ。」

とて、落すと消えさうな肩なぞへに、手を掛けた
のは盆の上の南京の小鉢である。

「何でございますえ、そんな溶けかゝつた雪の塊、
傍に置いても骨まで寒い、打棄つて上げませう。」

「まあ、飛だ事を、お吉さん　ー　恥かしいほ
ど柿や蜜柑の好きだつた私だけれど、もう此の節で
は、味がなづんで、其の露も欲うござんせん。うま
れてから覚えのないほど旨いのは雪の水の、それは
私の生命なの、夜、夜中でも、たべたい、と私が一
言いひさいすると、お寐らずに介抱をして下さるお
姑さんが取つて来て下さいます。」

今もね、此の釋迦八相を詠めて居ると、何うやら、
あの、未來も頼もしく、氣が恍惚と成つた處で、

仰向く　顔臍長けて、

「此のね、天井の眞中へ。」

「えゝ、」　と髪結は肩を縮めた。　ー　聞

ものゝ心も遠くなるやうな、ものいひと容子であつた。

「黄色をした、それがどんよりと光るやうな、龍がしらの船が一艘霞のやうな帆が掛つて、紫の雲の上をすつと段々に降りて來ますとね、其の帆の裏に表に透いて、亡くなつた私の父と母と、死別れた三人の姉弟が乗つて居てね。」

「え、え、え。」——お吉は、きよろ／＼と四邊を見る。

「兩親が手を取るから、私　　濟、濟まないが、お吉さん、東京へ歸るのでございますか、と聞いたならばね、合點々々をなさるから、私、つい、懐しくつて、

「あれ、お泣きなさいますな。」

と言ひながら、涙聲で、

「はい、それから、何うなさいましたえ。」

四

「縋り着いて乗りました、ふツと浮いて、」と言ふ、其の聲は沈んだが、聞く身は思はず其の人の袂を壓へた、寒さを厭つた襲着も、ひとへに柔かな空蝉である。

「づツと室の中を、畳を離れて上りましたよ。天井へ蒼空の見えるうつろが開いて、其處を抜けようとした時にね、鄰家の屋の棟で聲がした、

彼處で雪かきをして居ますねえ。」

「えゝ、其奴なんですごいますよ。」と、雪を浴びせられた髪を壓へたが、轉んだ姿を思出した顔を見よ。

「其の人が言ふのにね、（お隣の祖母さん、危いお年よりが屋根の縁で、何をなさる。）と言ひますとね、お姑さんの小さな聲で、（雪を一掴み取りに来た。）とおつしやつた。（ばかされては不可ません。見渡す限り天も地も雪がない處はない。）とお隣のが又、然う言ふと、尚ほ低い姑さんの聲で、（嫁御が何も咽喉へ通らぬ。此の雪ばかり食べたがりますが、路や屋根に積つた

のは、ふわ／＼と糠のやうで、舌に觸つて食べられぬ。凍てゝ氷つて、つる／＼と口でとけると嬉しがりませんが、此の屋根の尖端でないと、氷柱に成つて下らうとして半分氷つた處がない。とのおつしやるのが聞えると、両親はわつと泣く。私は炬燵へ落ちたとおふと、うける掌の赤いやうな、血の涙の流れる處を、アマから密とお姑さんがお降んなすつてね、勿體ない、其鉢に一杯、私の目には瑠璃に見える。お吉さん。」

「御免なさいまし／＼、御免なさいまし、」と、震へながら誦すが如くにお吉が言つた。

「私は一の末ツ娘で、我儘ばかり甘やかされて、何一つしつけはされず。お菜ごしらへ、御飯焚、まゝ事もおんなじで、誰に上げようやうもなし、針は持つても人形。剪刀と言へば千代紙で、小兒の衣が袋に成ります。すたりものとも、不具とも、たとへやうの無いものを、嫁さん、嫁さんとおつしやつて、夜の長いには蕎麥かきを、春の日永にかき餅を、それもお姑さんがお手づから。」

「あゝ、御新姐さん、もう堪忍して下さいまし。」

「お寺からの、唯た今、紅の護符が届いたぞ

「 姑が、兩の老の手に、頂き／＼上つてご

ざつて、

「 髪結さん、お構ひも申さぬ。

嫁さん

がの、もう誰より、貴女のお見舞を喜ばつしやる。

お忙しからうけれど、緩りとござつて頂

きたいの。」

「 お祖母様。

「 とばかり言つて、お吉は俯向い

て手を支いた。

「 お上人様から、姉さんの病氣を案じ

て、御丹精なさつた言つて、寺男の三藏が届けに來

ました 早速一服頂かつしやるやうにの。」

小き皿の白雪に、丈凡そ一寸三分、幅は五分ば

かりの、いと尊き短冊形に、字の上に字を重ねて、

一部の薬王品に書籠めたれば、紅に紅をさし、紅を

さして、輝く笹色は紫の濃きより濃く、霞める紅は

花の紅なるよりも紅である。

お千は身動きも、まゝ成らぬ、霧の消えさうな花

片の、片頬を炬燵に横にして、

「 私に罰があたります。何から何まで、お姑さん、

申上げやうもございません。」

と、熟と姑を瞻つて、睫を貫く涙の露は、水晶の
數珠に異らず。

雪の露に、薄紅に浮上る、法華經の文字を据ゑな
がら、

「おほ、私が手から進ぜるから、爲まい心遣をさ
しやつて、言はずとも行ひ仕誼をさつしやるよ。」

ひがんで言ふでは決してないがの、心安う、
孫の手から飲まつしやれ。の雪次や、雪次や。」

「はい。」

と言ふと、こはいかに、夜伽が代つて其處に休む、
鄰の室の炬燵を劃つた六枚折の背後から、廻つても
出る事か。四尺翻然と七歳に成る、雪次郎とて、
お千の一人子、輕業ではない、櫓を踏臺の惡戲坊主。
母さんの掻卷の裾に、潛つて居れば可いものを、小
脇差を箆笥から、上に飾つた人形を盗取つて引抱へ
て、すらりと抜いたを口に銜へ、川中島の繪本を開
いて、鬼小島彌太郎と僭上し、櫓をはらんばひに泳
ぐ最中。知らん顔はしたりと雖も、腹帯
擬ひの紺絞に、鞘が残つて顯れたり。

五

「はい。」と雪次が小指の先で、紅い護符の經を溶く。

「お姑さん、貴老のお手で飲まして下さいまし

雪が、こぼすと不可ません。」

「私で、可いかな　おほ、可、可。」

口で含むと雪なす胸へ、色の透いた其の紅。

霞に透る紅梅とて、炬燵の友染春めけども、たゞ、それも果敢い影であつた。

唯、見つゝ、雪次が引入られるやうに、うつかり、指を口へ入れた。

母さんが、屹と視て、

「あゝ、小兒は大事なからうけれど、お婆さんに我儘言つて、午飯も、無鹽でなければおすましでない。法華經を勿體ない、此方へお出し

と指を引いて、もぢ／＼と膝で出るのを、軽く唇に銜へた時、雪は震へた、母親も、ぞつとしたやうに面を伏せたが、ふと美しく眉を開いて、

「お姑さん、此の御恩で治りましたら、おいしくね、いつものやうに、乾餅を焼いて食べさせて下さいまし。――」

「おい／＼、いま焼いて進ぜうの。」

「お吉さん。」

「はい。」と、まだ涙で居る。

「お姑さんに甘える嫁　そして此の子の

おつかさん！」と雪の指に頬摺して、「羨しか

らうねえ。あッ、」と咳入るのを、姑と、雪が、

背後から搔擦る。

「知りませんよ、御新姐さん。」故とお吉がす

ねたやうに言つた。ツンとした體に横を向く時、床

の間の掛物に、白衣の觀世音を拜んだのである。傍

の壁に立掛けて、六尺ばかり二人立、白頭、赤頭、

紅白爛漫の牡丹に狂ふ、連獅子の押繪の見事な、大

なる羽子板を見た。

左右の兩手に四ツの枝、花笠着たる面影や、其の

面影は――

「錦繪で見ましたけれど、助高屋でなし、田之太夫でなし、御新姐さん、此俳優は誰なんでございま

すえ。」

「それはの、俳優ではないけなよ。髪結さん。」

故と然うして、芝居の振事の押繪にしたが、其の舞子二人の顔は、寶生太夫父子の面影を映した物のさうにござつての、お千さんの阿母さんが御殿に奉公した時の頂物ぢやと言ふ事での。

心ばりの春景色ぢや。いつもなら、此の

嫁さんが、それは上手につくのぢやけど。」と、いひかけて。口澁る。

「あれ、お祖母さんが可い加減な

はゝゝ。」

と笑つて、摺寄つて、

「此の大な羽子板を、華奢な貴女が、御新姐さん、眞個に持てましたかい。」

「ほゝゝ。」と、靜に笑顔をもたげた。が、此

の子の母とは思はれず、仇氣ないまで恍惚しつゝ、

「あゝ、お吉さん、貴女も羽根をお突きかい、

――髪に眞白な突羽根をさしてさ。」

と、觸りはせぬが手探ぐる指。お吉が髪に手を

遣つた、雪のなごりに濡れては居る幽な

ほどは残つたらうが、突羽根の羽根と見るまで一片

の白いのが、今まで消えぬ事はない。 瞳

が開いて幻の大きなのは病む人の危篤の兆、お吉が、ハツと肩を引いて、「雪ちゃん、早く眞個の羽根を母さんに。 幻にしては不可ない。」

「おい、」

と、こんな事は、すばやい小兒、返事より先に、床の間へひよいと乗った。

「白いのだよ。」

「あい。」

「あゝ、白いのだね。」とお干が見つゝ、二ツ三つ、指のしなひに羽根が飛ぶ、と思ふとトンと掌へ

「雪次、其の羽子板を持つておいで。」

「嫁さん、お前。」

「御新姐さん。」

「お姑さん、あなたが御恩の雪の露で、紅護符を飲みました 此の羽子板が持てないぢや。」

腕白の手にさへ持重る、板三尺の二人立、十五輪の牡丹の花を、片手に引いた炬燵の上へ

「さくら羽根にしませうね、はずまないから。」

白羽を含むと、ちら／＼と染まるは紅、口紅か、

あゝ、

――

咽^の喉^どの血^ちが、
いま咳^{せき}入^いつた。

――

六

「お吉さん、障子を開けて下さいな。」

「まあ、貴女、お身に觸りはしませんか。」

「否、不忍の景色に似て居ます。」

お吉は言の下に窓を開けた。――東なる、春日

山の山の尾の雪を被いで青空に連る端に、一本松

――去年時雨の頃に心中があつた。――松の

一樹も、繁る枝に、上野の森の風情して、すつくと

白鷺のイむ袖に、遠き湖の光を抱く。――十

重、二十重、十里、三十里、雪の中に圍まれ

ながら、お千は池の端を見たのである。あはれ、其

の雪の松は、紅護符、法華八卷八枚の皿の數を、五

つ餘した時、美しい人の法名と成つたのである。

「いゝ景色だねえ、御覽なさいまし、お姑さん、

貴老、いつでもお讚め遊ばす、羽根をついて。

肩一つおたゝかせなさらぬ、不孝な嫁が不

孝の仕納め、甘えてお見せ申します。――

と、カチリとついて一つトンとつけた。それから

は、唯、座のうちを、一片の雪が千々に飛ぶ。炬燵

に凭れた片手捌きの、手さきも雪のちり／＼に、
羽根は高く舞ひ、低く狂ひ、放せば發み、うければ
踊る。遁げれば戻し、箭るゝを掻取る、と見るうち
に、羽子板の縁でうけ、角で投げて、もつともお吉
を驚かしたのは、下へ突落して、上へ引いた。不
思議なばかり手の冴に、春日山は窓に近づき、一本
松は姿を寄せ、湖は小波立てゝ、突羽根の影、雪を
流す。

お千の後髪はら／＼と、牡丹の花片、かつ散るば
かり。且つ狂ひ、且つ戯れ、留南奇颯と薫る中に、
紅白二頭の獅子頭、つきての、手に胸にからまる如
く、天井を拂ひつゝ、花笠に羽根をかざして、紅白
に颯と亂れ、房々と立舞ふありさま、此の人健にし
て舞臺に立つて、袖を翻すに異ならず。

餘りの事に、うつかりと立つた雪次郎が、打仰ぎ
／＼、手を開き、足をつまだて、裾も空に、心を取
られて、羽根と齊しく、トン／＼と、足拍子を上へ、
下へ
――屋根の雪が誘はれて二片三片、
ひら／＼表に散り来るばかり、吹込む風も無かつた

のに、呼吸切したか、羽根が留る、板にも返らず宙にかゝつて、松の枝に縋ると見た。八ツと一打、空を飛んで、颯と窓の外へそれつゝ消え行く、眞白な羽根とゝもに、七歳の兒の胸が横に、頭から足を空に衝と抜けて、づしんと雪に地響打った。

途端である。お千の姿がおのづから、褥をすつと抜け出して、魂のやうに窓に立った。二階から轉げ落ちた人間に驚いて、下に居た職人が三人、父の時春ともるともに、門から雪に駈上る。雪は仰向けに雪に轉げて、さしのぞく母親の顔を見て、莞爾した。手には白羽根の櫻羽根、紅のついたを犇と持つ。人々は唯瞬間に、息を詰めた。爾時、押繪の羽子板を、衣紋をしめて頤に、黒髪黒くみおろした。さすが水木の名とりとて、寢衣の裳少しも亂れず、きりゝと一しめ伊達巻を――心を籠めた母親の恩愛の瞳を屹と、唯、取直した羽子板を、一息に、颯と、うしろへ引くと、雪の身體は、躍上つた。連子すれに筋斗うつて、はずみに、炬燵へ乗つたのである。

【完】